

建築論事典

日本建築学会編

彰国社

建築論 theory of architecture 建築家 architect 意匠 design 環境 environment 記号 sign 空間 space
形態 form 現象学 phenomenology 構成 construction 古典 classics 時間 time 象徴 symbol 住まい dwelling
制作 production 設計 planning and designing 素材 material 存在論 ontology 伝統 tradition 都市 city
場所 place 批評 criticism 風景 landscape 風土 climate アーキグラム Archigram アールト, アルヴァ Alvar Aalto
アイゼンマン, ピーター Peter Eisenman アルベルティ, レオン・バティスタ Leon Battista Alberti
イームズ, チャールズ Charles Eames 磯崎 新 Isozaki Arata 伊東忠太 Ito Chuta ヴァーグナー, オットー Otto Wagner
ヴァレリー, ポール Paul Valéry ウィットカウアー, ルドルフ Rudolf Wittkower ウィトルウィウス Vitruvius
ヴィラール・ド・オヌクール Villard de Honnecourt ヴェンチュリー, ロバート Robert Venturi
大江 宏 Ohe Hiroshi オルムステッド, フレデリック Frederick L. Olmsted カーン, ルイス Louis I. Kahn
ガウディ, アントニオ Antonio Gaudí ガデ, ジュリヤン Julien Guadet コールハース, レム Rem Koolhaas
今 和次郎 Kon Wajiro サリヴァン, ルイス Louis H. Sullivan 篠原 一男 Shinohara Kazuo
シュジェ Sugar ショワジー, オーギュスト Auguste Choisy ジョンソン, フィリップ Philip Johnson
シンケル, カール・フリードリヒ Karl Friedrich Schinkel シンドラー, ルドルフ Rudolph M. Schindler
ゼムパー, ゴットフリート Gottfried Semper セルリオ, セバスティアーノ Sebastiano Serlio タウト, ブルーノ Bruno Taut
立原道造 Tachihara Michizo タフーリ, マンフレッド Manfred Tafuri 丹下健三 Tange Kenzo
チーム 10 Team 10 チュミ, ベルナル Bernard Tschumi デ・ステイル De Stijl
デュラン, ジャン=ニコラ=ルイ Jean-Nicolas-Louis Durand ノルベルグ=シュルツ, クリスチャン Christian Norberg-Schulz
バウハウス Bauhaus 原 広司 Hara Hiroshi パラディオ, アンドレア Andrea Palladio 表現主義 Expressionism
ファン・アイク, アルド Aldo van Eyck フランクル, パウル Paul Frankel ブレ, エティエンヌ=ルイ Étienne-Louis Boullée
ブロンデル, ジャック=フランソワ Jacques-François Blondel ベヴスナー, ニコラウス Nikolaus Pevsner
堀田捨己 Horiguchi Sutemi ボロミーニ, フランチェスコ Francesco Borromini 前川國男 Maekawa Kunio
榎 文彦 Maki Fumihiko 増田友也 Masuda Tomoya マニエリスム Manierism マンフォード, ルイス Lewis Mumford
ミース・ファン・デル・ローエ, ルートヴィッヒ Ludwig Mies van der Rohe メタボリズム Metabolism
モリス, ウィリアム William Morris 森田慶一 Morita Keiichi 吉阪隆正 Yoshizaka Takamasa
ライト, フランク・ロイド Frank Lloyd Wright ラスキン, ジョン Jhon Raskin ル・コルビュジエ Le Corbusier
ルドゥー, クロード=ニコラ Claude-Nicolas Ledoux ロウ, コーリン Colin Rowe ロース, アドルフ Adolf Loos
ロシア構成主義 Constructivism ロジエ, マルク=アントワーヌ Marc-Antoine Laugier ロッシ, アルド Aldo Rossi

はじめに

「建築」の基盤を成す自然環境や生活環境が地球規模で激しく変貌している現在、「建築」の諸問題を根本から問い直す「論」そのものへの関心が高まっている。人間の思索によって捉え直された科学・技術以前の生き生きとした「建築の言葉」が、そしてその掘り下げが改めて求められているのではないか。

体系的な建築論は、ヨーロッパ世界では古代ローマのウィトルウィウス以来、すでに2000年に及ぶ歴史を刻んできた。翻ってわが国では、かつて森田慶一がこのウィトルウィウスの西洋古典思想を包括的に捉え直すとともに、「全一」としての建築の理論を新たに提起したことによって、学としての建築論が基礎づけられた。それは言うなれば、今日の細分化した建築諸学の基底に立ち戻り、建築世界を全体として問う理論であり、学問分野としてであった。この原理的で厳密な学としての建築論の役割は、現代にあっても何らその意義を失っていないが、しかし近年では同時に、「建築」への探究がその方法において空間論、風景論、場所論、環境構成論、あるいは現象学や存在論などとして、さまざまな位相において展開し、深化してきていることも疑えない。

また一方、広義な意味での建築論は、建築家の制作に伴う思索から、造形ないし意匠に関する理論的考察や方法論的分析、そして「建築」を受容する立場での批評や評論にいたるまで、実に多様な拡がりを見せている。とりわけ現代にあつては、建築デザインがますます変容し、一面では表層的な流れの中で混迷の度合いを深めているといえなくもない。言い換えれば、全体を見渡すのが極めて困難で、かつ相互の繋がりが歴史的あるいは社会的脈絡を辿るのも容易でない、そういう状況でもあろうということである。それゆえ、まさに今こそ、建築論の領域での新たな測量にもとづく、現代的な地図づくりが希求されているといえよう。

本書は、こうした要請に応えるべく91項目のキーワードを選定し、必要な解説を加えた用語事典である。本書の特徴は、それぞれの項目の解説が比較的長く、たんに語義の説明だけでなく、執筆者による建築論的な解説がなされていることである。また、目次や索引を利用して引くことのできる事典であると同時に、全体としても部分としても読むことができる事典として目論まれている。

第1部「建築論の方法と領域」では、建築論に固有の課題や現代思想の方法概念を通して建築論の主題の拡がりや展望され、その成果と可能性が論述されている。第2部「建築家の思想」では、理論家、制作者、あるいは実践者としての建築家の「言葉」と「作品」の分析を通して、その豊かな世界が読解され、また建築の理論と設計行為や造形意匠の諸相、そしてそれらの連関が論究されている。

本書は21世紀の現在において、「建築」について改めて問い直し、再び考えようとするための用語事典である。今世紀を生きる学生、建築家、研究者をはじめ、建築と人間の環境に関心を寄せる人々が、先人の成果を継承しつつも自らが新たな開墾を為すために、この事典を手にとられんことを望んでいる。

■第1部

建築論の方法と領域

14	建築論	theory of architecture
18	建築家	architect
	*	
22	意匠	design
26	環境	environment
30	記号	sign
34	空間	space
38	形態	form
42	現象学	phenomenology
46	構成	construction
50	古典	classics
54	時間	time
58	象徴	symbol
62	住まい	dwelling
66	制作	production
70	設計	planning and designing
74	素材	material
78	存在論	ontology
82	伝統	tradition
86	都市	city
90	場所	place
94	批評	criticism
98	風景	landscape
102	風土	climate

■第2部

建築家の思想

108	アーキグラム	Archigram
110	アールト, アルヴァ	Alvar Aalto
112	アイゼンマン, ピーター	Peter Eisenman
114	アルベルティ, レオン・パティスタ	Leon Battista Alberti
116	イームズ, チャールズ	Charles Eames
118	磯崎 新	Isozaki Arata
120	伊東忠太	Ito Chuta
122	ヴァーグナー, オットー	Otto Wagner
124	ヴァレリー, ポール	Paul Valéry
126	ウィットカウアー, ルドルフ	Rudolf Wittkower
128	ウィトルウィウス	Vitruvius
132	ヴィラール・ド・オヌクール	Villard de Honnecourt
134	ヴェンチューリ, ロバート	Robert Venturi
136	大江 宏	Ohe Hiroshi
138	オルムステッド, フレデリック	Frederick L. Olmsted
140	カーン, ルイス	Louis I. Kahn
144	ガウディ, アントニオ	Antonio Gaudi
146	ガデ, ジュリヤン	Julien Guadet
148	コールハース, レム	Rem Koolhaas
150	今 和次郎	Kon Wajiro
152	サリヴァン, ルイス	Louis H. Sullivan
154	篠原一男	Shinohara Kazuo
156	シュジェ	Suger
158	ショワジー, オーギュスト	Auguste Choisy

160 ジョンソン, フィリップ Philip Johnson
162 シンケル, カール・フリードリヒ Karl Friedrich Schinkel
164 シンドラー, ルドルフ Rudolph M. Schindler
166 ゼムパー, ゴットフリート Gottfried Semper
168 セルリオ, セバスティアーノ Sebastiano Serlio
170 タウト, ブルーノ Bruno Taut
172 立原道造 Tachihara Michizo
174 タフーリ, マンフレッド Manfred Tafuri
176 丹下健三 Tange Kenzo
178 チーム10 Team 10
180 チュミ, ベルナール Bernard Tschumi
182 デ・ステイル De Stijl
184 デュラン, ジャン=ニコラ=ルイ Jean-Nicolas-Louis Durand
186 ノルベルグ=シュルツ, クリスチャン Christian Norberg-Schulz
188 バウハウス Bauhaus
190 原 広司 Hara Hiroshi
192 パラーディオ, アンドレア Andrea Palladio
194 表現主義 Expressionism
196 ファン・アイク, アルド Aldo van Eyck
198 フランクル, パウル Paul Frankl
200 ブレ, エティエンヌ=ルイ Etienne-Louis Boullée
202 ブロンデル, ジャック=フランソワ Jacques-François Blondel
204 ペヴスナー, ニコラウス Nikolaus Pevsner

206 堀口捨己 Horiguchi Sutemi
210 ボロミーニ, フランチェスコ Francesco Borromini
212 前川國男 Maekawa Kunio
214 横 文彦 Maki Fumihiko
216 増田友也 Masuda Tomoya
218 マニエリスム Manierism
220 マンフォード, ルイス Lewis Mumford
222 ミース・ファン・デル・ローエ, ルートヴィッヒ Ludwig Mies van der Rohe
224 メタボリズム Metabolism
226 モリス, ウィリアム William Morris
228 森田慶一 Morita Keiichi
232 吉阪隆正 Yoshizaka Takamasa
234 ライト, フランク・ロイド Frank Lloyd Wright
238 ラスキン, ジョン Jhon Raskin
240 ル・コルビュジエ Le Corbusier
244 ルドゥー, クロード=ニコラ Claude-Nicolas Ledoux
246 ロウ, コーリン Colin Rowe
248 ロース, アドルフ Adolf Loos
250 ロシア構成主義 Constructivism
252 ロジエ, マルク=アントワーヌ Marc-Antoine Laugier
254 ロッシ, アルド Aldo Rossi
257 索引



ヴァレリーの「自画像」

フランスの詩人・思想家。アカデミー・フランセーズ会員。南仏の小漁港セツトに生まれる。象徴派詩人マラルメを師と仰ぎ、その活動は、詩作から対話篇、文学・芸術・文化全般の評論に及び、またその思考の道程を示す膨大な手記「手帖」を残した。1937年から1945年に逝去するまで、コレージュ・ド・フランスで「詩学講義」を講述した。

建築論において詩人ヴァレリーが問題とされるのは、かれの文学的対話篇『エウパリオスまたは建築家』(1921)が、具体的に建築の制作をめぐる弁証法的対話によって建築することの根源性を探究しながら、より一般的に人間が到達せんと願う根源性を示唆するからであって、森田慶一はこの対話篇を建築論的作品と見なしている(文献3)。

多感な青年ヴァレリーは、自我の危機(「ジェノヴァの夜」と呼ばれる)を体験して、厳密な方法による精神の行為的究明を自らに課すのが1892年である。それ以降に「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」(1895)、『テスト氏との一夜』(1896、テスト氏とはフランス語で頭脳だけの存在を意味する)が成立する。前者は創造的精神の行為を究明しようとした芸術論であり、後者は純粹精神の行為を擬人的に描き出す。これらは後のヴァレリーの主題、自己と他の反立と交錯のはじまりと終焉のドラマを通じて暗示される全体的な錯綜体をすでに素描している。

1900年頃以降は、思索と「手帖」を書く日課以外の著作から離れた沈黙の約20年を過ごす。親友アンドレ・ジードの仲介により実現する長詩「若きバルク」(1917)の出版がその後の多くの著作成立の契機となる。この詩篇は、夜の睡眠と暁の覚醒のあいだに展開する精神と

身体の分離と交錯を通じて現成する意識・無意識のドラマを歌う。

詩集には『魅惑』『旧詩帖』、対話篇には『エウパリオスまたは建築家』『魂と舞踏』『固定観念あるいは海辺の二人』から晩年の劇作『我がファウスト』などがあり、さらに政治・文明・芸術評論も加わる。第二次世界大戦中は時の権力に組みせず、知的詩人の立場を堅持し、1945年のヴァレリーの死は国葬をもって遇された。

ヴァレリーの思索と制作の真髄は私的な日課として書きつづけた「手帖」にあるといわれる。残された膨大な手帖はC.N.R.S.のファクシミリ版出版物(1957-61)によって、またその一部はガリマール社のプレイアード叢書中の2巻(1973-1974)で出版されているのみで、全貌の解釈は今日も未踏である。

ヴァレリーは、デカルトの「コギト」において、「われ在り」より行為的な「思う」をより根源的とする立場に立つ。自己の反立として成立する作品、そのまた反立にほかならぬ作者(新たな自己)の定立、この周期が精神の思考の運動であり、その過程において身体的な世界(存在)とさまざまに産出される形姿の幻想(非在)の交錯が見取られ、その原初のはじまりが長詩「若きバルク」の覚醒の主題にほかならず、それこそが究極の全体的なるものであることを発見した。

ヴァレリーにとって「書くこと」は、精神の運動の軌跡であって、この運動そのものが作品を生み出し、その上位に立って、魅惑する手強い感受性と永遠に戦いつづけるあの古代ローマの剣闘士グラディートルに擬えられる知性の働きであり、作品は物理的事物的制約によって固定された虚の形姿であって、作品の新たな受容者の精神を覚醒させて動かすかぎりのものであるとされる。現代思想における「作者の

消滅」「間テキスト性」の先駆と評価されるゆえんである(文献6)

ヴァレリーにおいては、建築作品の場合のように注文によって他者が介入してつくられる作品と、生涯にわたる精神鍛錬の軌跡である「手帖」とは、相互補完的に相照らし合う関係にある。作品は厳密な思考に導かれ秩序立てられた成果であり、「手帖」は「無秩序の秩序」の総体を表象している。

『エウパリオスまたは建築家』の意図は、「純粹思考と真理の探究は、何らかの形の発見あるいは形の構成を思考するほかに道はないことを明らかにすることだといわれる。つまり、有形に到達し得ない哲学者と合理的意識的な探究を目指して形を構成する芸術家が対置されるのである。1921年に発表されたこの対話篇(図録『建築』の巻頭論文としてEditions de la Nouvelle Revue Françaiseから出版された)は、1923年には同じ前記の出版社から、対話篇『魂と舞踏』と組み合わせて一冊の書物として出版される。この二つの対話篇は天秤の両皿の上に載せられ「絶対芸術の相貌をして釣り合っていて」「前者(『エウパリオスまたは建築家』)にあつては石柱が身体を様式化し、後者(『魂と舞踏』)にあつては身体が石柱を様式化する」(アルベール・ティボーデ)といわれ、また、この作品(『エウパリオスまたは建築家』)は、「プラトン中期のイデア論を代表する彼のパイドロス篇の芸術哲学を、プラトン後期のティマイオス篇の否定媒介的構成思想によって展開し行為化したもの」(田辺元)とも解釈されている。

『エウパリオスまたは建築家』では、自己分裂した二つの極に登場人物パイドロスとソクラテスが充当され、パイドロスは過去の生々しい身体的行為の記憶に浸透され、ソクラテスは身体を知らず煙のように空しい諸観念を生みつづける精神そのものを代表する。ソクラテスは、パイドロスを通じてエウパリオスの身体的行為(構

築)の思い出を聞かされ、そのうちに自らの内奥に行為し生きようとして身体を希求する欲望のあることに気付く。そこでソクラテスは変身して身体の行為によって実現されるべき未到来の作品世界を夢想し、パイドロスはソクラテスの変身に従ってゆく。全編の構成は、生そのものを表象するイリスソ川の流れを前にしてその岸辺(死者の領域)に佇み対話する場面設定にはじまり、パイドロスの理性礼賛、エウパリオスの訓言、美についての議論、エウパリオスの建築術、諸芸術の上位におかれる建築と音楽、哲学者ソクラテスのなかの建築家、自然の作用と人間の構築行為、哲学者ソクラテスの後悔へと進み、懐疑のエピローグに終る。以上の対話は自由な精神の「幽界から自然に生まれた戯れ」であり、この戯れこそが作品の本質を成す構成にほかならず、作者の底意であることが示唆される。人間が希求する不死の全一は、精神と身体とが覚醒して競合するこの「自然の戯れ」にこそ成立することだと結論される。

ヴァレリーの建築観は、分離された原理(美・用・強)に基づいて幾何学的方法によって構築する建築術を中心に据える。建築術のはじまりと究極の結実である「歌う建築」作品の効果指摘し、さらに建築行為の主体として全一を希求して努力する範例的人間像としての建築家と、彼が歩む探究の道・方法が、明快に構成された文学作品として示されている。(加藤邦男)

■文献

- 1.『ヴァレリー全集(増補版)』全12巻・補2巻、鈴木信太郎ほか訳、筑摩書房、1977-792
- 2.『カイエ篇』全9巻、寺田透ほか訳、筑摩書房、1980-83
- 3.『エウパリオスまたは建築家』森田慶一訳、森田慶一『建築論』東海大学出版会、1978所収
- 4.加藤邦男『ヴァレリーの建築論』鹿島出版会、1979
- 5.加藤邦男『建築論素描—ヴァレリーの対話篇『エウパリオスまたは建築家』を巡って』『新建築学大系6 建築造形論』彰国社、1985所収
- 6.小林康夫ほか編『フランス哲学・思想事典』弘文堂、1999

アメリカの建築家。1901年、エストニアのサレマ島に生まれる。1905年、家族と共にフィラデルフィアへ移住。ペンシルヴァニア大学においてP.クレにボザール教育を学ぶ。1928-29年、最初のヨーロッパ旅行。1932-33年、建築研究グループを組織し、フィラデルフィアのハウジング計画などに従事。1948-57年、イエール大学教授。1959-51年、アメリカン・アカデミー在外建築家としてローマに滞在し、イタリア、ギリシア、エジプトを旅行する。1957-74年、ペンシルヴァニア大学教授。1971年、AIAゴールドメダル受賞。1972年、RIBAロイヤルゴールドメダル受賞。1974年、インドからの帰途、ニューヨークのペンシルヴァニア駅にて心臓発作のため死去。

カーンの成熟は遅い。1951年春から初夏にかけて、在外建築家としてローマに滞在していたかれは、地中海域のスケッチ旅行を企てる。遅い成熟は建築作品ではなく、まずスケッチの中に実現される。帰国後、最初の成熟が訪れる。イエール大学アート・ギャラリーの仕事は1951-53年のこと。1954年に始まったトレントンのユダヤ・コミュニティセンターの計画を経て、1958年にロチェスター・ファースト・ユニテリアン教会の作業に着手。カーンの全作品を支配するフォーム・ドローイングの図式が描かれる。実施案に近い第4バージョンの平面スケッチは1960年に描かれる。カーンの名を世界に広げることになるリチャーズ医学研究所の計画は1957-61年のこと。カーン中期の思索の根幹を成すリアライゼーションとフォーム、そしてデザインとの関わり合いを示す図式が1960年に描かれている。第2の成熟が訪れるのは、この頃である。1960年代の前半に、ソーク生物学研究所、プリンモア大学女子寮、フォートウエイン・アーツセンターなど強力なフォームを内包するカーンの主要作品の多くが実現される。

さらに、アーメダバードのインド経営大学とダッカの国会議場のマスタープランの設計が1962年に着手されている。

晩年、カーンの思索は深化、転回する。建築のピギニングがラディカルに問われることになる。エジプトの経験が想起され、沈黙と光の最初の素描が1968年に描かれる。素描は、その後、1969年、1973年に修正される。沈黙と光の思索は、1974年の死に至るまで深化、変転をつづけていたのである。晩年の鍵語、ルームが発語されるのは、講演「ルーム、街路、そして人間の合意」(1971)、講演「1973年、ブルックリン、ニューヨーク」(1973)においてである。よく知られた「ルーム」と「街路」と「都市」についての3枚の素描(言葉を含む)は1971年に描かれている。

フォームとデザインとの区別：カーンの思索の方法に関する原理中の原理といえるリアライゼーションの構想が表明されるのは、1959年のCIAM第11回大会(オッテルロー)においてである。建築と都市の近代建築を主導したCIAMは、この大会をもってその活動を終える。カーンの思索の成熟と近代建築の終焉は奇妙に重なる。1960年に、リアライゼーションの指向的相関者、フォームが発語され、思索の主導語となる。同時に、フォームとデザインとの二項対応が成立し、50年代のオーダーとデザインの二項対応は、フォームとデザインの二項対応に取って代わる。オーダーからフォームへの変転が目される。フォームの意味は、リアライゼーションに基づき、リアライゼーションの深化、変転とともにその意味もまた変転することになる。1961年に『プログレッシヴ・アーキテクチュア』誌に掲載されたリアライゼーションの図式(図1)は、この時期のカーンの思索を集約するものである。図式の中央に書かれた文

字、transcendence(超越)とは、図式における上方への移行をいう。リアライゼーションは感情(feeling)と思惟(thought)との融合と見なされる。フォームの意味は、それゆえ、超越論的意味と形相的意味に区分される。前者はフォームの根拠としての夢、願望に属し、後者は不可分な要素の統合を意味する。ユニテリアン教会の設計の初めに描かれるフォーム・ドローイングは、この不可分な要素の構成の在り方を示すものであり、図式に含まれている「聖域」と「回廊」のモチーフは、先の超越論的意味と形相的意味に符合する。フォームの概念は、その後展開されるカーンの建築作品を解き明かす鍵となるものである。

存在論的思索：60年代の後半、カーンの思索は転回する。主導語、フォーム(本質存在)がインスティチューション(事実存在)へと変転する。フォームを問うリアライゼーションの立場から、ピギニングの場所を問う存在論へと転じたのである。インスピレーション(ピギニングの感情)とインスティチューションとが新たな二項対応となり、リアライゼーションとフォームとの二項対応に取って代わることになる。

ピギニングの場所をいう沈黙と光についてのカーンの思索は、光の形而上学ではない。エ

ジプトの経験が、この思索を統べている。古きものうちの、最も古きものである古代遺跡の経験が追想される。カーンはこう語っている。「作品は、駆り立てる労働の騒音の中で形成される。そして塵が降り積もるとき、ピラミッドは沈黙を反響させつつ、太陽に自らの影を還す」と。沈黙の反響の中で感覚されるのが、「表現せんとする願望」である。沈黙は「表現することとして在らんとする願望」と規定される。光が「自然の事象」であるのに対して、沈黙は「人間の事象」と見なせる。主題は、二つの事象の交錯の仕方にある。沈黙は光へ、光は沈黙へ、という二つの移行の交叉として、ピギニングの場所が示される。二つの移行はこう解釈される。光の2義、つまり光(=存在としての存在)と燃え尽きた光(=物質)は沈黙を媒介として、沈黙において、結び合うことを明示する方法であると。光と闇(物質)は沈黙の内、カーンの造語に従えば、ライトレス(lightless)、ダークレス(darkless)として相争う。つまり、光と闇は沈黙に依存する。光の存在論的思索を図解する素描がある(図2)。左に沈黙を意味する水平線群、右に炎の舞踏としての沈黙が描かれる。輝く源泉である光は、荒々しい炎の舞踏を経て、やがて燃え尽き、自らを消費して物質になる。そして中央にピラミッド。左右のそれぞれは沈黙の

図1 リアライゼーションの図式

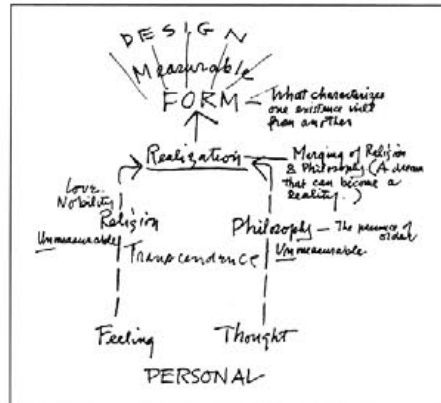
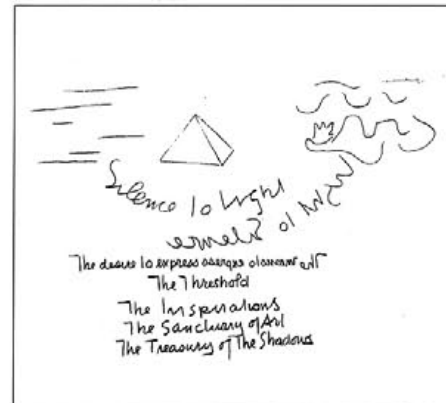


図2 沈黙と光の素描



芸術は古来、二つの源泉をもっている。一つは、感覚的な外界であり、他の一つは内的ヴィジョンである。印象派は、感覚的な外界に帰依することによって、外界の印象を刻印しようとする。表現派は、感覚的なものを越えた、目に見えないヴィジョンを刻印しようとする。そこには常に二つの危険が待ち構えている。一つは、自然模倣としての自然主義芸術であり、他の一つは観念芸術であり、社会主義リアリズムのようにイデオロギーの表出にまで至ることがある。その二つの危険を避けながら、感覚的なものと感覚的なものを越えたものとのバランスをとることが、優れた印象派の芸術と、優れた表現派の芸術を生むことになる。

建築は、とりわけ自然主義にはなりえない芸術であるから、表現派に傾く傾向をもっている。しかし、建築がもつ多くの現実的な条件によって内的ヴィジョンの表出を抑えられている。そこから多くの優れた建築ヴィジョンが生まれ、表現派建築の多くは未完の建築のドローイングとして残されている。しかし、建築であるかぎりには実施されなければならない。1920年代のドイツを中心に起こったこの芸術運動は、建築においても、ブルーノ・タウト、エーリッヒ・メンデルゾーン、ハンス・ベルツィヒ、ヘルマン・フィンステルリンなどを生んでいる。一方ではモダニズム誕生の時代であり、第一次世界大戦後のナチス・ドイツ到来直前のワイマール時代の幸運の中で、第一次世界大戦によって抑えられていた建築衝動が内から外へと吹き出した芸術的エネルギーであった。

ハンス・ベルツィヒ(1869-1936)の作品のうちでは、「ザルツブルグ祝祭劇場案」(1920-1922)がその典型である。実現された作品としては、ベルリンの「グローセス・シャウシュピール・ハウス」(1918-1919)がある。演出家ラインハルトの依頼によって「シューマン・サーカス」の常設

小屋を改築したものであるが、自由奔放な鍾乳洞を思わせる内部空間をつくり上げた。ハンス・ベルツィヒをドイツ表現派の建築家として第一に取り上げる理由はここにある。

ブルーノ・タウト(1880-1938)の場合、現実にて建てられたものの中で表現主義建築と言えるものはほとんどない。ドローイングの作品としては「アルプス建築」(1917-20)を挙げることができる。ブルーノ・タウトは、この「アルプス建築」によって彼の内的ヴィジョンを展開し、アルプスを、地球を、遊星をもデザインするに至る。「都市の冠」(1919)においては、ソロモンの神殿に倣う新しい「都市の冠」たる神殿を用途を離れた純粋建築として建てようとし、建築家は人間感情の深奥に宿るものを掘り起こす魂の芸術家である、と考えた。ブルーノ・タウトを表現主義建築の思想的代表とする理由はここにある。実現された建築としては、パウル・シェーアバルトの『ガラス建築』に対応したドイツ工作連盟展の「ガラスの家」(1914)を挙げることができる。

エーリッヒ・メンデルゾーン(1877-1953)は、そのドローイングにおいても、実施された建築においても、表現主義の作家であった。そのドローイングは、「産業建築」(1917)、「光学機器工場」(1917)などにみられるように、多くの曲線、曲面に被われ、鉄とコンクリートの新しい造形美に向かっている。1914年に描かれた多くのスケッチは、第一次大戦の始まった年のものであり、それらは内的ヴィジョンの表出を求めている。そのうちで実施されたのがポツダムの「アインシュタイン塔」(1920)である。1913年にアインシュタインに会い、彼の相対性理論に関心をもち、その実証のために「アインシュタイン塔」を建築することになる。全体はダイナミックな表現に満ち、メンデルゾーンの情念が内的ヴィジョンの表出として実現された作品である。

ヘルマン・フィンステルリン(1887-1973)の作品は模型かドローイングとしてのみ知られており、実際に建てられた建築はない。その意味では、表現主義の建築家ではなく、表現主義の思想をもった作家である。フィンステルリンの有機建築は、建築それ自身が生物的有機体の特徴をもっている。フィンステルリンの内的ヴィジョンは、建築が愛であり、戦争であり、運動であり、聖なるものであるように、人間的なものの表出である。そのドローイングの作品「シュタルンベルク湖畔の別荘」や「聖堂」、「赤い家」(1922)などに、いずれもフィンステルリンの有機建築としての内的ヴィジョンの表出を見ることができている。フィンステルリンはまた、「建築積木」によって自らの思想を表現し、幻想的な建築を多く創った。それは「様式遊戯」として教育的効果をもっている。

ルドルフ・シュタイナー(1868-1925)をドイツの表現派作家に加えることは、アントニオ・ガウディをアール・ヌーヴォー作家または表現派作家に加えることと同様、ひとつの問いである。しかし、表現主義の思想を自然の外に依存することなく、人間の内的ヴィジョンによって表現する建築と捉えるかぎり、ルドルフ・シュタイナーはこれまでの表現主義建築家以上の存在である。なぜなら、シュタイナーの建築は、ヴォルフガング・ペーントが『表現主義建築』(1973)の中で指摘するように、人間そのもの、人間の思考と感情と意志の表出として構築されているからであり、それらは模型やスケッチに残された多くの表現派作家と比較すると、「第一ゲーテアナム」(焼失)(1920)、「第二ゲーテアナム」(1928)や「ハウス・ドゥルデック」(1915)、「ハイツ・ハウス」(1914)、「ガラス・ハウス」(1914)、「オイリュトミー・ハウス」(1920)など、そのすべてが実現され、作品として残されているからである。ゲーテアナム建築は、とりわけ宇宙の建築であり、地球と人類の発展を表出するものであった。建築を内的ヴィジョンの表出として捉え、そ

れを実践した作家を表現主義建築家と呼ぶとすれば、表現主義建築家は1920年代にもペーター・ペーレンス、バルンハルト・ヘトガー、ミハエル・ド・クラークなど、またその後の時代にもハンス・シャローンやゴットフリート・ベーム、フランク・O・ゲーリーやダニエル・リベスキンド等々数多く見受けられる。日本の例としては、1926年当時ベルリンに滞在した今井兼次(1895-1987)は表現主義運動の代表ヘルムート・ヴァルデンをはじめ、ブルーノ・タウト、エーリッヒ・メンデルゾーン、ハンス・ベルツィヒ、フリッツ・ヘーゲルなどと個人的に交り、かつルドルフ・シュタイナー、アントニオ・ガウディの建築作品を日本に紹介し、作品「日本26聖人殉教記念館」(1962)、「大隈記念館」(1966)、「桃華楽堂」(1966)などによって内的ヴィジョンの表出を行った、極めて表現主義的な建築家であった。

(上松祐二)



ルドルフ・シュタイナー 第二ゲーテアナム外観

■文献

- 山口廣『ドイツ表現主義—近代建築の異端と正統』井上書院、1972
- ヴォルフガング・ペーント『表現主義の建築』(1973)長谷川章訳、鹿島出版会、1988
- 上松祐二『シュタイナー・建築—そして、建築が人間になる』筑摩書房、1998